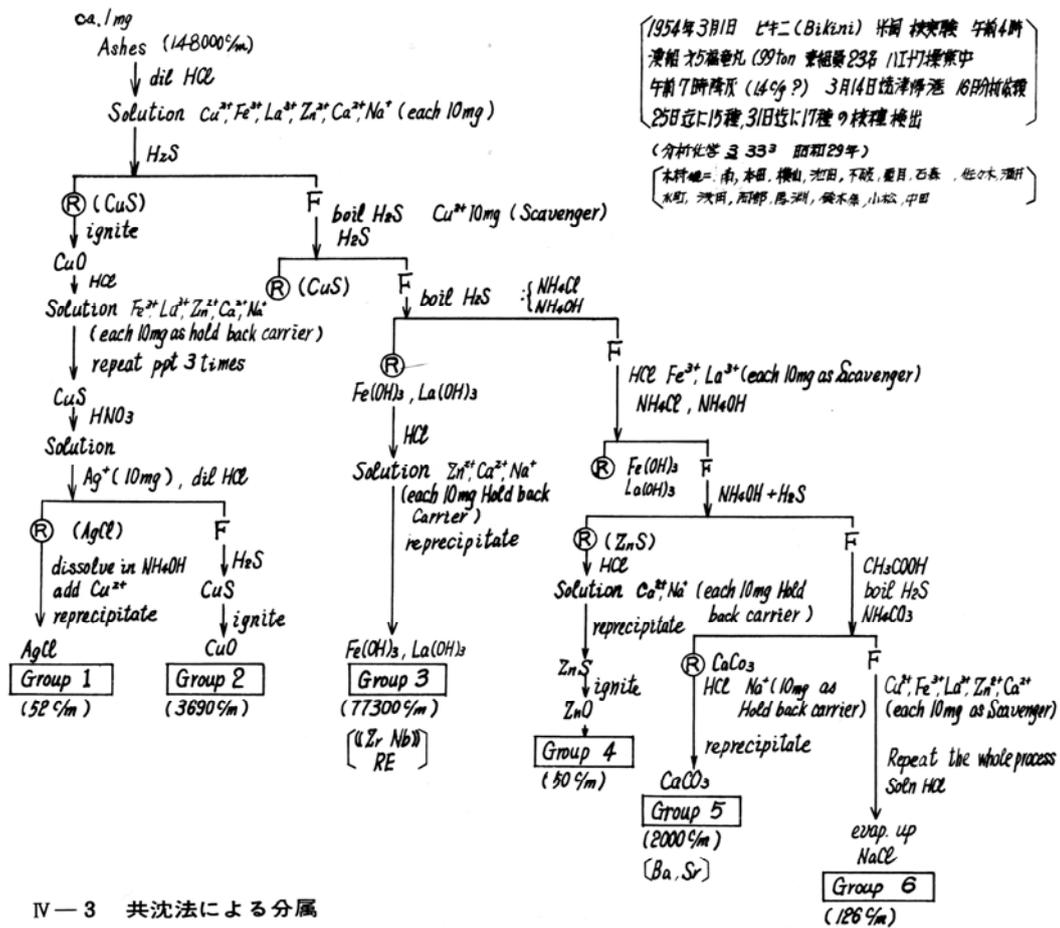


IV-3

1954年3月1日南太平洋ビキニでの米国の核実験のさい、付近で操業中の漁船第五福竜丸に放射能灰が落下するという事態が発生した。船員は焼津入港後、東大病院に入院した。この灰や、捕獲されたマグロ（日本各地に入荷）の中に含まれる放射性核種の分離分析がわが国の数ヶ所で行われた。この分離法は東大グループにより、緊急にまず行われた灰（さんご礁の破片）に関するものである。試料灰の元素の分属のため担体（それぞれの分離過程での役割に注目せよ）を加え、通常定性分析の手法を用いて分属し、その放射能が測定されている。それぞれの分属分離で得られた放射性核種は、さらに半減期やβ線吸収法によるβエネルギーの推定なども併用して同定された。このときからわが国の戦後の放射化学研究が活発になった。



IV-3 共沈法による分属

「放射能要覧」

金沢大学

放射性同位元素委員会編

(昭和61年 再版)